２．３．２　　アグリ・ビジネス探究ゼミ

アグリ・ビジネス探究ゼミは、双葉郡の農業生産の現状を鑑み、今後の農業とビジネスを探究するゼミである。令和４年度はアカデミック系列、スペシャリスト系列農業、商業の生徒から成り、計８名（女子８名）で実施している。自らの関心のある事柄と「農業」や「商業」の分野を関連させ、地域の課題解決に向けて探究活動を行っている。

（１）はじめに

アグリビジネスゼミに所属する生徒は、商品開発に関心を持つ者が多い。所属生８名のうち７名がスペシャリスト系列の農業または商業選択者であり、教科の授業をとおして地域資源を活用した商品開発に取り組んでいる。それゆえ、教科と連携させながら、双葉郡の資源を使った商品開発を目指す活動を進めてきた。

全体の活動としては、２０２２年７月２１日に、福島大学　農学群職農学類　則藤孝志先生による「フードシステム」についての講話を聴いた。『農業と食品産業は、原子力災害からの復興を目指す「車の両輪」である』という研究上の理念から始まり、農と食による地域の盛り上げ活動の考え方や実践例について学んだ。講話の後半では、本ゼミ生に向けて「(探究のテーマについて）なぜそれをするの？」という問いかけがあり、探究のきっかけや思いを語り合う場面もあった。

（２）実施内容

テーマおよびキーワードは、次のとおりである。

テーマ	キーワード	編成
エディブルフラワーの栽培とゼリー作り	農業、食用花、無農薬栽培、地域活性化	グループ
美容で双葉郡の魅力を伝えたい!	美容、商品開発、双葉郡の果物、地域活性化	グループ
双葉郡のフルーツで町を元気にしよう！廃棄品を使用した新商品の開発について	商品開発、双葉郡の果物、果糖、ジャム	グループ
双葉郡の新土産「コーヒーかす」の石鹸～コーヒーかすの再利用可能性について～	再利用、商品開発、コーヒーかす、石鹸	個人

（３）成果

①エディブルフラワーの栽培とゼリー作り

地域の花を使ったスイーツを作り、双葉郡の景色を多くの人に知ってもらうことを目的とした探究活動である。スペシャリスト系列農業選択者３名から成る班で活動し、花の無農薬栽培と、花を使ったスイーツ作りを行った。

県内でエディブルフラワーの栽培を行っている「にこにこバラ園」を訪問し、エディブルフラワーに適した花の品種の選び方や、無農薬での栽培方法について学んだ。８月より本校施設内でマリーゴールドの無農薬栽培を実践し、エディブルフラワーの自家栽培に成功した。温室内での栽培管理が継続できなかったことが原因でアブラムシがついたが、希釈した食酢水溶液を噴霧することで対処する工夫がみられた。

自家栽培のマリーゴールドを使ったスイーツ作りでは、花の見た目や香りをそのまま残すことが可能な濡奈加工法として、ゼリーを選択した。ゼリーは二段仕立てとし、下層にはヨーグルト風味の白いゼリー、上段にはエディブルフラワーが入った透明なゼリーを重ね、味も見た目も高評なスイーツが完成した。

探究で得られた学び・力は、「コミュニケーション能力」と、地域のために自ら動く「行動力」である。同班の活動成果は、２０２３年１月開催の「県総合学科高校生徒研究発表会」にてポスター発表を行った。

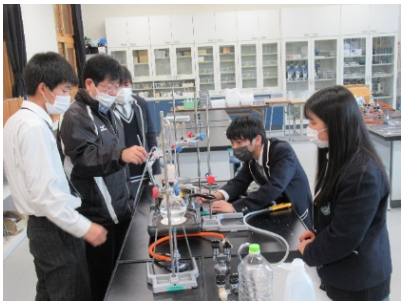
②美容で双葉郡の魅力を伝えたい!

若い世代の話題となりやすい美容に着目し、双葉郡産の果物を活用した化粧品作りと、それによる若者の呼び寄せを目的とした探究活動である。

広野町で化粧品を製造している「(株) レイス」を訪問し、直接肌に触れる商品は、アレルギー検査の実施や安全性を示すための申請が必要であることを学んだ。

肌につけない美容製品として、香りでリラックス効果や美容効果が得られるアロマに着目した。水蒸気蒸留法の装置を自作し、みかん皮やバナナ皮、ドクダミなどから香りを抽出した。結果は、採れた香り成分量は微量であり、アロマ効果を期待できる香りではなかった。抽出法や抽出資材の改善をすることで、日本人好みのフレッシュで清潔感のあるフルーティーな香りが得られ、双葉郡の果物から話題性のあるアロマができると期待できる。

探究で得られた学びは、他者との関わりをとおして「ものごとの捉え方が広くなった」ことだ。見学先の工場での相談や、カタリバスタッフからのアドバイスから多くの気づきを得られた。探究活動をきっかけに、他者の考えを受入れようとする姿勢が強まったという成長が見られた。



③双葉郡のフルーツで町を元気にしよう！廃棄品を使用した新商品の開発について

双葉郡産の果物を活用した新商品開発を目的とした、砂糖不使用のジャム製造についての探究である。

果物に含まれる果糖に着目し、果糖を抽出・粉末化することで、砂糖の代替品としてジャム作りに活用しようと考えた。バナナ、キウイ、オレンジなどの果物をペースト状にし、濾過して得られた濾液を７０℃で１～２週間乾燥させて､粉末化を目指した。結果は、得られた乾燥物にはべたつきがあり、粉末化はできなかった。べたつきの正体は、乾燥不十分によるもの、または濃縮された果糖のいずれかであると考察している。

探究で得られた学びは、「物事は思い通りに進まない」ということと、その解決のためには「視野を広げること」が必要だということである。果物から砂糖が取れると勘違いしたまま実験を行っていたため失敗続きと感じていたが、実はこれらの実験ではドライフルーツが完成していたことなどに、発表会をとおして気づきを得ていた。

④双葉郡の新土産「コーヒーかす」の石鹸～コーヒーかすの再利用可能性について～

本校カフェで廃棄されているコーヒーかすに着目し、コーヒーカスを活用した石けん作りを目的とした探究である。

石鹸の自作を目指し、食用オイルと苛性ソーダ水を混合する製造法と、グリセリンソープを融解する製造法の２つを実践したが、結果は難しかった。

いわき市で石けん製造を行っている「GSauto JAPAN・ANDANTE」を訪問し、コーヒーかすを使った石鹸の商品化についての会談を複数回行った。コーヒーかすをリサイクルことの意義や、石鹸におけるコーヒーかすの消臭効果などを協議し、商品化に向けて具体的な企画立てをした。年度内の実現には至らなかったが、継続する価値のある探究である。

探究で得られた学びは、「情報に直接触れる」ことの大切さである。本探究では、情報の収集や発信において SNS は極力使用せず、実際に見たものや触れたものを信用して活動を進めてきた。直接触れることで気づきを得られたり、信頼関係を構築できたりした。

（４）課題と展望

地域資源を活用した商品開発を自分で企画し、必要な技術を自ら外に学びに行ったが、多くの大人との関りから地域課題について再確認し、実践を通して何を学ぶのかを整理していくことが必要である。

2. 3. 1. スポーツと健康探究ゼミ

概要

東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故から 12 年が過ぎた。この 12 年の間には、避難指示区域の解除や常磐自動車道と JR 常磐線の全面開通、ふたば未来学園高校と小高産業技術高校の開校、J-village の機能再開など、復興が進み明るい話題が増えてきた。震災や原発問題で受けた子どもたちの運動能力低下問題も、様々なプログラムが考えられるようになり、少しずつ回復傾向に向かっている。しかし、震災や原発問題の余波もいまだに残り、福島県民の生活に不安を残し続け、不自由な環境で生活を送っている人々もおり、時間が経過したことで忘れられようとしていることや新たな課題が生まれていることも事実。将来的な課題は続いている。さらに、今年度は新型コロナウイルス感染症が世界で拡大。私たちの生活する日本、福島県にも大きな影響をもたらし、震災からの復興を目指すスピード感にも鈍りを与えた。

「当たり前は当たり前ではない」。これは 12 年目に私たちが身をもって感じたことである。そして今、「ステイホーム」「新しい生活様式」「緊急事態宣言」「ソーシャルディスタンス」など、私たちはまたそれを感じる事態となっている。日常の一部であった「スポーツ」というものが、どれだけ多くの人に元気や勇気を与え、様々な課題を解決できる可能性を秘めたものであったのかを改めて感じることとなった。「する」「観る」「支える」「知る」。このような状況にある今だからこそ、世界や社会、地域、さらには自らの課題に目を向けて、どのような課題が蓄積されているのかを知り、スポーツを生かして世界や社会、地域、自身の課題解決を目指す。

（２）**はじめに**

スポーツを通して地域を豊かにする方策を探究する。総合型地域クラブによる地域活性化、健康の増進、子どものスポーツ環境の支援、スポーツビジネスによる持続可能で豊かな地域の実現やアスリートとしての技術や体力向上に関する科学的見地からの探究と実践を行ってグローバルリーダーの育成を目指す。

（２）**実施内容**

①　興味あるテーマに対する文献調査

高校１年次に決めた、各生徒のテーマに沿って、インターネットや図書館を使用した文献調査を行った。生徒が抱える小さな問いやテーマに関係する、人、施設、団体、専門家を切り口として、既に行われている取り組みや、分かっていることの情報を収集した。

その際、インターネットや図書館を使った調査する方法や気を付けることに対して、実践的に学習する機会を設けた。

2　地域のスポーツ振興を担う施設、団体の訪問

文献調査の後、地域のスポーツ振興を担う施設、団体を代表して、広野みかんクラブとナショナルトレーニングセンターＪヴィレッジを訪問、取材を行った。文献調査で分かったことと実際に活動している方から得た情報の同じ部分や異なる部分を通して、生徒が持つテーマをより多様な視点で向き合う時間を設けた。

3　グループ学習(調査・アクション)

文献調査や地域の実態、声を通して得た情報を基に、より深く調査する内容を探索し、生徒自身がどのようなアクションを通して、地域のスポーツ振興に寄与するかを検討した。実施する内容によって、個人で活動する生徒やグループで活動する生徒がいたが、生徒の主体性に任せ、グループ学習を行った。

広野 Revolution”

「自分たちの得意なスポーツを使って貢献できる」ことを探して、活動を始めた。調査する中で、広野町が福島県の中でも運動力が低いことを知った。広野小学校の教頭先生と協議を重ね、小学校でスポーツイベントを開催し、小学生に運動する機会を届けた。

“外遊び減少解決”

東日本大震災による福島第一原子力発電所事故により、屋外で遊ぶ子どもが減ったことを基に、子どもの外遊びを促進するために活動を始めた。東日本大震災の影響はなくなりつつあるものの、新型コロナウイルスの感染拡大により、屋外よりも屋内で遊ぶことが増え、運動する機会が減っていることが明らかになった。この問題に対して、みかんクラブと協働し、小学生が放課後に外で遊ぶ機会の提供を目指し、活動している。

“肥満児を減らそう”

広野町において、肥満児の割合が多いのではないか、という認識を基に、アンケート調査を実施した。その結果、運動が嫌いな生徒が多かったことが分かった。その調査をもとに、子どもたちがスポーツを好きになれる体験を届けたいと考え、アクションの準備を行った。こども園でも実践する予定だったが、コロナウイルス感染拡大により、中止に追い込まれてしまった。

“Easy Sports で not 苦手

「運動が苦手な人を減らすにはどのようにすればよいか」という疑問を基に活動を行った。高校２年生対象にスポーツに関するアンケート調査を行った結果、幼い頃からスポーツをやっていることがスポーツへの苦手意識に関係していることが分かった。その調査を基に、こども園に通う子どもが楽しめるスポーツを開発した。

“コロナ禍でもスポーツ観客数を増やそう”

新型コロナウイルス流行により、スポーツ観戦ができなくなった経験を基に、「コロナ禍でもスポーツ観戦ができるようにしたい」と考え、活動を始めた。いわき FC の試合ボランティアを行うことや、VR でのスポーツ体験を通して、多様なスポーツ観戦の実現により、スポーツ観客数を増やせることが分かった。現在、ふたば未来学園のバドミントン部と協働して VR コンテンツを作成し、学校内で部活動の応援が活性化することを目指して活動している。

“高齢者に健康的な食事を”

「高齢者の食生活を改善することで、健康寿命を延ばすことができるのではないか？」と考え、活動を行っている。みかんクラブへの取材を通して、高齢者は運動していないことはないことが分かった。そこから、食生活によっても健康を実現できるのではないかと考えた。実際に、街中でインタビューを行い、塩分摂取量に対して気にしていない人が多くいることが分かった。今後、イオン広野店や行政機関と協働して、高齢者の意識醸成を目指す。

“筋トレをして運動不足を解消しよう”

みかんクラブの取材を通して、地域住民がランニングやウォーキングをしていることが分かった。より運動効率を上げるために、筋力トレーニングも必要なのではないかと考え、活動を行った。筋肉を鍛えることで、自分に自信が持てたり、集中力がつく可能性を知り、どのように効率的に筋肉を鍛えられるのか、実践を通して考えている。

“ケガゼロプロジェクト”

ケガをしない環境を作ることを目指して、活動を始めた。けがの予防には、タンパク質の摂取が重要だと考え、プロテインを効率的に摂取する商品の開発を行った。しかし、タンパク質はとりすぎると体に悪いことが分かった。そのため、各アスリートが必要なプロテイン摂取量が分かるアプリケーションの開発を行った。

“怪我をなくして笑顔広がる世界を創る”

ケガをしてしまう理由をケガの知識を得られていないことだと考え、活動を行っている。地域の方に、より多くのケガの知識を得てもらうために、YouTube や Web サイトなどのインターネット利活用や、講習会を実施するなど、直接コミュニケーションをとる方法を含めて、準備を行っている。

“野球に興味をもってもらい野球人口を増やそう”

ふたば未来学園がある広野町では、野球のスポーツ少年団が数年前になくなってしまったことを受け、「より多くのこどもに野球に触れる機会を作る」ことを目的に活動を始めた。一学年上の生徒が類似している活動を行っており、協働して実践を行った。

“パークゴルフで肥満率低下と地域活性化”

広野町の肥満率と運動不足を解消することを目的として、地域が所有している二ツ沼公園のパークゴルフを利用することを通して、地域課題に取り組んでいる。大学教授へのヒアリングや類似した活動を行っている一学年上の生徒との協働を通して、よりよい関わり方を模索している。

“バドミントンで地域活性化”

広野みかんクラブで開かれているバドミントン教室の参加者増加を目指して、活動を始めた。バドミントン部所属の生徒が、持っているスキルを活かし、学校がある広野町に対してできることとして、バドミントン教室を選んだ。週１回、バドミントン教室を手伝い、小学生が楽しんでバドミントンができる環境を模索している。

“サイクリング”

好きなサイクリングを通して、地域に貢献することを目指して、活動を始めた。いわき市にある、いわき自転車文化発信・交流拠点 NORERU?の方にヒアリングを起こった。情報収集や、実際にいわき市や双葉郡でのサイクリングを通して、双葉郡をめぐるグループライドを企画している。

“スポーツを通して町をきれいにしよう”

広野町にポイ捨てのゴミが多くあることに問題意識を持ち、活動をはじめた。日本で普及しているスポーツ GOMI 拾いを通して、広野町をきれいにすることを目指した。実際にイベントを開催した中で、きれいにすることよりも参加者がゴミに対する意識の変化が起きることに気づいた。より多くの人に意識の変化を起こしてもらうために、小学校や地域でのスポーツ GOMI 拾いイベントの実施を計画している。また、広野町生涯学習発表会や FM いわきで活動の報告を行った。

“遊んで知って広げよう”

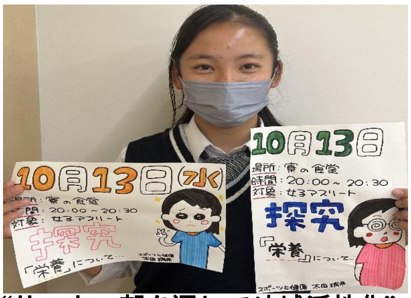
世代関係なく、高齢者や子どもの交流がもっと増やしたいという思いを持ち、活動を始めた。実際に、子どもを対象にしたイベントを実施し、子どもと関わることがとても大変だということに気づいた。その気づきを基に、多世代が交流する方法を模索している。

“サッカー好きを増やそう！！！！”

広野町や楢葉町にはサッカーをする環境があるのにも関わらず、地域にサッカーが浸透していないと感じ、サッカーの楽しさを伝える活動を行った。女子サッカーチームへの訪問や専門家へのインタビューを通して、地域に対してできることを模索している。

“アスリートに必要な栄養を少量で効率的に摂る方法とは”

「少食なアスリートが無理せず栄養を摂取できるようにしたい」と考え、活動を始めた。株式会社明治の方とオンラインでヒアリングを行い、現在のプロテインやゼリーの現状を知ることができた。これまでの調査を基に栄養指導をふたば未来学園のアスリート生徒に行う予定だったが、コロナウイルス感染拡大により中止となった。



“サッカー部を通して地域活性化”

「サッカー部の活動を通して、広野町に元気を届けることができないか」と考え、活動を始めた。町民の意見を聞くために、アンケートを作成した。その中で、地域住民がふたば未来学園を遠い存在としてとらえていることを知った。サッカー部をはじめとするふたば未来学園が町民との距離を縮めるにはどのようなことができるか、検討している。

（３）成果

スポーツと健康探究ゼミに所属する生徒は、男子サッカー部、女子サッカー部、野球部、バドミントン部に所属していることがほとんどで、トップアスリート系列として日頃からスポーツや運動に親しんでいる。しかし、スポーツの４観点（する、見る、支える、知る）で見ると常に「する」立場にいる。このことは、チームメンバー以外に交流することがないことを意味する。なぜなら、スポーツを極めるにはそれ以上の関わりが必要ないからである。

しかし、未来創造探究は、地域の課題に焦点をあて、自らのやりたいことと重なる課題を解決するために活動する。すなわち、学校外の人と交流しながら、地域の人のために活動をするのである。

このことは、生徒にとってはこれまでと全く異なる経験だと認識している。これまでは、自らの能力やチームのレベルをあげることだけ考えればよかった。それに対して、未来創造探究は自分以外の人たちのことを考え続けることが要請される。

最初の時点では、生徒は地域の方に取材をしたり、協働することに対して、緊張していたり、積極的な姿勢を示さなかった。だが、地域の方との接点が増える、実際に生徒によって何かを提供できたことなどによって、生徒が主体的な動き始めることがあった。様々な理由が考えられるが、「私でも、誰かになにかできる」ということを経験から気づくことができたからではないかと考えている。

スポーツはいつか、手段になる。お金を稼ぐためかもしれない、子どもに何かを教えるため、誰かを支えるためかもしれない。スポーツを超えて、だれに何をなしたいのか、簡単ではないが、生徒が少しずつ考え、生徒自身の思いを形に行ってもらいたい。

（４）課題と展望

スポーツと健康ゼミに所属する生徒の多くはトップアスリート系列であるため、各部活動の試合や練習日程などにより、フィールドワークや各種の体験会などにグループ全員で参加することが難しい場合がある。長期休業中も同様であり、探究活動と部活動のバランスがうまく取れない状況がある。授業時間をうまく活用し、より多くのアクションを起こしていくには、情報共有や機会提供の面でより工夫が必要だ。

個別活動が、2 人以上のグループになることに対して、策を講じる必要があると考える。スポーツと健康ゼミは8割以上の確率でグループを作る。興味関心が同じである場合は、グループ活動をしてもよいと考える。しかし、ある程度の確率で、生徒は自らの興味関心に向き合いきれていないことが分かった。グループになることで、プロジェクトは前に進みやすくなる。しかし、生徒のやりたいことや興味関心に寄り添うことは忘れてはならず、生徒が主体的に行動できるような状態を作る必要はあるのではないか。

また、トップアスリート系列の生徒は、各生徒が行うスポーツ以外に興味関心を薄いことがある中で、地域に目を向けることには多くの人的サポートを必要とする。しかし、現時点では、生徒にあった人数の先生を配置できていないと感じる。教員側のスキル面もあるかもしれないが、地域と向き合う経験が比較的少ない生徒に対して、よりよいサポートができる体制を構築できることを望む。

探究活動を何のために行うのか。プロアスリーにになれるのはほんの一部の選手のみであり、プロアスリートも必ずどこかで引退を迎える。いわゆる「セカンドキャリア」である。高校生のうちからスポーツの４観点に触れ、様々な角度からスポーツを探究していくことは今後の人生に必ず生きてくるはずである。選手を続けている期間でも、探究で学んできたことで視野が広がったり、様々な気づきに繋がっていくと思う。

２．２．３　　健康と福祉探究ゼミ

本ゼミは、少子高齢化や人口減少が加速する地域において住民が安心して暮らすことができる町づくりを目標として活動している。アカデミック系列生徒４名、スペシャリスト系列生徒７名（農業１名、福祉６名）の計１１名が所属し、地域の課題解決に向けて、昨年度から個人あるいはグループで探究活動を行ってきた。

自分が興味関心を持っている事柄と「健康」「福祉」の分野を関連させ、世代間交流の活発化や防災意識の向上、食習慣の見直し等、よりよい生活の創造を目指し探究と実践を行っている。

（１）はじめに

昨年度は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、時間をかけて準備してきたイベントが直前で中止となる等、対面での探究活動が思うように進められないことが多く、落胆する生徒の姿も見られた。今年度は、オンラインを活用したり、規模を縮小したりする等、当初の予定にこだわりすぎずに課題解決のためのアクションを行っていくように、生徒たちへの声がけとアドバイスを行ってきた。

（２）実施内容

①２年次の活動

５月から７月にかけて福祉科教員、大学教授、栄養教諭による講義や演習を受け、「福祉」「健康」「栄養」分野についての知識を得ることで、探究活動を進めるヒントをつかむことができた。夏季休業中に各自のテーマについて調査を行い、８月にはその内容をゼミ内発表会で発表し、同じゼミの生徒や教員からアドバイスをもらった。９月以降は、課題解決のための活動を個人、またはグループで進めてきた。

②今年度の流れ

・中間発表（４月２６日）

２年次で行った探究活動の内容と、今後の活動予定について、PowerPoint を用いて発表を行った。見学者からのコメントと発表の振り返りが、その後の活動を進めるうえでのヒントとなった。

・課題解決のためのアクション（４月～１２月）

新型コロナの状況を踏まえて活動の見直しと実践を繰り返した。

・未来創造探究　生徒研究発表会（９月２４日）

これまでの探究活動について PowerPoint を用いて発表を行い、審査員と見学者からコメントを頂いた。

・論文作成（１０月～１月）

２年間の探究活動を論文にまとめた。

③探究活動内容

・地域リング

南相馬市出身の２名が、地域における子ども、高齢者、障がい者の交流を増やすことを目標に活動を行ってきた。今年度は交流イベントを準備していたが、新型コロナの感染拡大により直前で中止を余儀なくされた。しかし、準備の過程で、地元で市民の交流イベントを行っている NPO 法人と出会い、ボランティアとしてそのイベントの運営に携わった。

南相馬市での交流イベント

・介護を知って興味を持ってみよう

高齢化が進行しているにも関わらず介護従事者が減っていることを問題視し、多くの人に介護に興味を持ってもらうことを目標に探究活動を行ってきた。今年度は、文化祭で本校生と来場者を対象としたボッチャ体験イベントを実施した。

文化祭でのボッチャ体験イベント

・ＬＧＢＴを知ろう

ＬＧＢＴへの理解を広めることを目標に、ＬＧＢＴへの認知度や理解度に関するアンケートを実施した。ハワイに短期留学をした際には、現地でＬＧＢＴに対する意識調査を行った。

・交流で地元の魅力を発信

他ゼミの生徒と協力して、本校が位置する広野町の魅力を住民の方々、広野小学校の児童、中学校の生徒、本校生から聞き取り、その魅力を地元イベントで発信するという活動を行った。

広野小学校の児童たちへ放送で協力を呼びかける様子

校内で広野町の地図を掲示

広野町の魅力を書き込んでもらったマップ

・ひとりひとりが取り組む防災

防災意識を高めることを目標に、校内外で様々な活動を行った。校内においては、他ゼミの生徒と協力して、避難訓練の改善と防災意識を高めるためのワークショップを提案し実行した。校外の施設においては、防災に関する展示と、広野町環境防災課から頂いた非常食の配付を行った。

防災ワークショップの様子

防災に関する展示

・中高生「食育」プロジェクト

若い世代に正しい食習慣を身に付けてもらうことを目標に活動を行ってきた。本校生に実施したアンケート調査の結果、味が濃いものを好む傾向が見られたことから、少ない塩分でも満足できる調理法を教える調理実習を実施する予定であったが、新型コロナの感染拡大により直前で中止となった。

・ＤＡＮＣＥでたくさんのＳＭＩＬＥを

コロナ禍で増加したストレスをダンスによって軽減させることを目標に、本ゼミの生徒２名で協力して活動してきた。校内でのダンスイベントを企画していたが、新型コロナの感染状況の悪化により中止した。感染者数が落ち着いてきた頃に、小学生を対象としたイベントを実施した。

ダンスイベント

・運動と音楽で子どもたちに笑顔を！

音楽と運動を通して子どもたちの笑顔を増やすことを目標に、本ゼミの生徒２名で協力して活動してきた。当初、広野町のこども園で音楽と運動を組み合わせたイベントを行う予定で準備を進めていたが、新型コロナの感染拡大のため中止となった。対象を小学生に広げて、イントロクイズや、ダンス、リレー等の活動を行った。

小学生にイベントについて説明する様子

（３）成果

今年度も、新型コロナが探求活動に与えた影響は大きく、対面でのイベント開催中止が相次いだ。しかし、多くの生徒たちが、イベントの対象者を変える等、あきらめず柔軟に対応し、実行に移した。実践を複数回行う生徒もいたが、行ったことに満足せず、振り返りを行い、次の活動を改善するという姿が見られた。

また、生徒の論文からは「自分が持っていた思い込みや偏見に気付いた」「自分で問題点を探し、解決法を考えられるようになった」「あきらめずに挑戦することの大切さを知った」「自分も地域の一員だという意識が強まった」等の記述があり、生徒自身が自らの成長を実感していることが伺われる。

（４）課題と展望

現在生徒たちは、課題解決のためのアクションを行う際に、イベントの企画や告知、参加者集め等を一から自分たちで行っている。しかし、既に地元で活動している団体と連携・協力することも手段の一つとして有効なのではないかと考える。

２．３．３　　探究活動発展のための発表会（未来創造探究　生徒研究発表会）

高校２年次から２年間取り組んできた「未来創造探究」の集大成の場として「未来創造探究生徒研究発表会」を開催した。本校における課題解決型学習の成果を披露する機会として、調査アクションのみならず、課題を解決するアクション、生徒自身の総括、社会への提言等を発表した。様々な分野の第一線で活躍されている方（専門知審査員）や地域の課題に取り組んでいる方（地域知審査員）に審査をお願いした。今年度は高校が 70、中学が 15 とのプロジェクト数が増えた一方で、昨年度の反省から１発表あたりの時間を長くしたため、分科会でコンテスト部門と交流部門に分け、コンテスト部門での上位発表のみを全体会に進出する形式を取った。また、中学校が開学して４年目であり、３年生が未来創造学の成果を発表する２年目となった。

（1）概要

① 目標　1）地域課題解決のための探究と実践に取り組む学習「 未来創造探究 」の成果をまとめて発表することにより、ふたば未来学園が定める人材育成要件（ルーブリック）に定めた資質・能力（D：表現・発信力、I：能動的市民性、J：自分を変える力）を育成する。

2）発表を聴講することにより、ふたば未来学園が定める人材育成要件（ルーブリック）に定めた資質・能力（A：社会的課題に関する知識・理解、I：能動的市民性、J：自分を変える力）を育成する。

3）保護者、地域の方々、県内外の教育関係者に本校の探究活動の内容を発信し、ステークホルダーとの協働関係をより強固なものにする。

② 日時　　令和４年９月２４日（土）９：００～１６：５０

③ 内容　　９：００～１１：０５　分科会（１２教室で７発表）※１０分休憩あり
１１：１０～１１：２５　休憩
１１：２５～１２：００　審査員によるミニ講義
１２：００～１２：５０　昼食・休憩
１２：５０～１３：００　★開会行事
１３：００～１４：００　★全体会Ⅰ（高校生代表発表）
１４：００～１４：１０　休憩
１４：１０～１５：１０　★全体会Ⅱ（中学生代表発表）
１５：１０～１５：３５　★閉会行事（結果発表，表彰、総評）
１６：１５～１６：５０　教員と審査員の探究交流会

④ 審査員　　専門知・地域地を持つ審査員１７名

	氏名	所属	専門／地域		氏名	分野 or 地域	専門／地域
1	田村　学　様	國學院大學人間開発学部　教授	探究	10	菅波　香織　様	未来会議　議長／弁護士	地域全般
2	松岡　俊二　様	早稲田大学大学院　アジア太平洋研究科　教授	地域全般	11	牧内　昇平　様	ライター・物書きユニット　ウネリウネラ	メディア
3	平山　勉　様	双葉郡未来会議　代表	富岡	12	下枝　浩徳　様	葛力創造舎 代表理事	葛尾
4	青木　淑子　様	富岡町 3.11 を語る会、元富岡高校校長	富岡	13	小山　良太　様	福島大学　食農学類　教授	アグリ
5	永井　祐二　様	早稲田大学　環境総合研究センター　研究院教授	再エネ	14	江川　賢一　様	東京家政大学人間栄養学部人間栄養学科 教授	スポーツ

6	中田　スウラ 様	福島大学　人間発達文化学類　特任教授	地域全般	15	明石　重周 様	Ｊヴィレッジ　職員	スポーツ
7	半谷　栄寿 様	一般社団法人　あすびと福島代表理事	再エネ	16	猪狩　僚 様	いわき市役所／IGOKU 編集長	福祉
8	丹波　史紀 様	立命館大学産業社会学部現代社会学科	原子力防災	17	佐藤　亜紀 様	HAMADORI13 事務局	福祉
9	高原　耕平 様	人と防災未来センター 研究部 主任研究員	原子力防災				

（2）詳細

① 事前準備

今年度の発表会は県内に「まん延防止措置」がとられている状況下での実施となった。昨年度同様に、コロナ感染症の防止対策を徹底して行うことに留意して実施することとなった。対策としては、全体会における三密回避を徹底するためにアリーナには高校２・３年次と中学校３年生だけとした（中学校１・２年生と高校１年次は別教室で Zoom 映像を参観する）。また分科会会場の人数についても多くなりすぎないように、８会場で分科会を行った。外部からの来場者は審査員のみとし、それ以外の参加者については Zoom によるライブ配信を行った。

実践内容を様々な観点から探り、参加者全体で学びを深めるために、分科会会場ごとに専門知を有する審査員１名、および地域知を有する審査員１名に参加していただき、校内審査員（教員）１名を加えて３名で審査をすることとした。地域知を有する審査員は本校の開校の経緯や生徒の探究活動が面的に広がってきたことをふまえ、昨年度は双葉郡の全八町村からお呼びするようにした。今年度はさらにいわき市からも審査員をお呼びした。審査員の方々はこれまで本校の探究活動に参画してくださった方が多く、依頼した審査員の方には快諾をいただいた。

今年度は個人探究に組んでいる生徒が増加し、更に中学校３年生の発表も加わったため、総数の増加が昨年度以上に増加した（今年度74PJ【高校48PJ、中学校16PJ】、昨年度は 48PJ）。そのため、今年度は動画による事前審査を行い、高校の発表プロジェクトを 58PJ から 32PJ まで絞ることとなった。また、昨年まで発表時間 10 分であったのを５分に短縮し、内容をより精選して発表するように指導をした。

・動画による審査（FlipGlid を使用）

発表を５分にまとめ、動画を Flipgrid 上にアップさせた。この動画は事前審査のために審査員とも共有をした。

② 分科会

・昨年同様に、分科会ではゼミの枠を外し、複数のゼミの生徒が参加するようにした。とは言え、分野については共通して括れるように配慮した。

・発表数と時間を勘案し、会場数は８会場、各会場で６発表（高校４発表、中学校２発表）を割り当てた。

・各分科会に外部審査員２名、内部審査員（本校教員）、司会（本校教員）を設定した。生徒は発表に集中できるように、係の設定は極力少なくなるようにした。

・発表するだけでなく、専門知を有する審査員によるミニ講義の時間を設定した。

・審査のための審査基準を作成し、その基準に基づいて各分科会会場で審査を行った（未来創造探究賞）。また生徒投票による審査も同時に行った（共感賞）。

・分科会の結果、以下のグループが全体会出場となった。（全発表内容については巻末資料を参照）。

	氏名	ミニ講義　タイトル
Ⅰ	田村　学　様	これからの社会に求められる資質･能力と探究
Ⅱ	松岡　俊二　様	本当に大事なことと向き合うことは容易ではない：11 年半を経た福島の原子力災害
A	丹波　史紀　様	原子力災害は何を地域にもたらしたか
B	高原　耕平　様	〈防災〉を哲学してみる
C	菅波　香織　様	対話が未来を作る～９年間の未来会議を通じて感じる無力感と希望～
D	牧内　昇平　様	メディアの原発問題報道
E	下枝　浩徳　様	祭復活からの葛尾村地域づくりについて～大丈夫、俺たちに未来はある～
F	小山　良太　様	震災１１年以降の福島県農業と新しい産地・ブランド形成の可能性
G	江川　賢一　様	これからのスポーツ健康科学
H	明石　重周　様	地域スポーツ振興におけるＪヴィレッジの役割について
I	猪狩　僚　様	福祉・行政・コミュニティと課題へのアプローチについて
J	佐藤　亜紀　様	地域コミュニティと向き合う

〇環境事業でシビックプライドを作ろう
〇Enjoy with the elderly
〇もったいないバナナ
〇大熊×いちご×私
〇Future Quest
〇子どもロコモ改善プロジェクト
〇鉄たまごという地域の可能性
〇わかものがたり

③ ミニ講義（専門知審査員による）
・本年度も昨年度同様に専門知審査員によるミニ講義をお願いした。特にこれから探究を進めていく低学年の生徒にとっては、専門家のお話を聞ける貴重な時間となった。昨年度は講義 20 分の内容であったが、今年度は講義の時間を 30 分とし、内容を充実させた。なお、ミニ講義のタイトルは以下のとおりである。

④ 全体会
・全体会では先述の高校生代表４プロジェクトと中学生代表３プロジェクト、中学校バドミントン部の特別発表の全８プロジェクトが発表した。表彰は以下の通りとなった。

「未来創造探究　最優秀発表賞」
・Let's cheer up ふたば!!
「未来創造探究　優秀発表賞」
・話せばわかる、話せば変わる～いわきを越えた学びを通して～
・子どもと若者の社会参画～未来のカタチ～
・海洋ゴミのことを次世代へ伝えたい
「未来創造探究　発表賞」
・誰一人取り残さない防災
・サステナブルな医療を！ by AED
・絵本を作って東日本大震災を伝承する
「共感賞」Let's cheer up ふたば!!
中学校「未来創造学　優秀発表賞」
・常磐線盛り上げ隊
・はるの花「桜」
・蛍復活

⑤ 総評（専門知審査員：佐藤理夫、菅波香織）
１）佐藤理夫先生から
・探究活動ができる恵まれた環境を振り返って欲しい。他校にはない充実した設備、熱心に探究に向き合っている先生、なにより地域の方々の協力があることを再確認して欲しい。
・中学生の皆さんの発表のレベルが高い。これをさらに高校で伸ばして欲しい。高校生も中学生の目標にな

るように頑張ってください。
・テクニカルな話になりますが、５分間のプレゼンはきつかったと思う。人に伝えたいものをもっともっと厳選して欲しい。グループでの発表は考察がちょっと甘いかなと思うところもあった。
・探究と学習が乖離していませんか？理系は特に高校までの理科的知識を踏まえてください。また、理系に限らずデータ解析などを活用してください。「やりたいことをやってみた」となってしまうPJも見受けられました。学んだものをいかし、どう進めれるか…特に大学進学を考えている方は意識してください。
・これは「探究」ではなく「地域貢献体験記」ではないかと思われるものがありました。それはそれで大切なことですが、成長するためには「高校生がやった」というレッテルがついて満足してしまってはいけない。20～30才にやった場合でも、そのプロジェクトが地域に活かされているか、考えたい。「高校生がやることだからまあいいか」となってしまうと甘くなる。探究はあくまで探究…。探究という言葉を再考してほしい。体験記録だけにとどまらない論文を期待しています。

2）菅波香織さんから

・地域の課題と自分の関心を合わせて、自分事としてとらえているのが分かりました。みなさんのネットを使った情報活用も上手でした。
・現状の把握として、アンケートなどをやっていたと思いますが、発表で見えてこなかった。データがもう少しあればよかった。また、印象で語られる発表も多い。「ヒントを貰えました」「印象が変わりました」というコメントには何を得たのか、どんな風に変わったのか、具体的に欲しい。
・みなさんが探究を主体的に取り組んでいるのが伝わりました。２つ目とも関係しますが、みなさんの探究の対象となる地域の子供、高齢者も主体を持つ存在です。コロナで難しかったと思いますが、お一人お一人の心情や意思や尊重すべきことも考えつつ、皆さんのやりたいことを掛け合わせて共創していければ素敵だと思いました。
・私的にドキッとしたり、違和感を覚えたワードがありました。皆さんもそれを友人らと言葉にして、対話をしてみて下さい。もやもやを一人の中で消してしまうのは勿体ないです。今日の探究のあとも、対話で未来を作ることを考えていただければと思います。

⑥ 教員と審査員の探究交流会

昨年初めて教員と審査員の探究講習会を実施して、外部審査員と担当教員との懇談会を、発表会終了後に設定した。生徒の発表を踏まえて、日頃の指導方法や連携の在り方等について忌憚のない意見をいただくことができた。今年度は「中学３年間の探究を高校でさらにどのように伸ばしていくか？」という問いを設定し、KPT（Keep,Problem,Try）法を用いてグループディスカッションを行った。

【Keep（そのまま続けたいこと）】
・発表の丁寧な言語化
・専門知と出会える場を作る
・率直な個人の興味を反映した探究（中学生）
・とがった才能をどんどん伸ばす

【Ploblem（問題点）】
・審査基準が文系の方が点数に反映されやすい（理系のプロジェクトを評価しにくい）
・理系をフォローできるゼミ編成
・高入生と一貫生のゼミの接続
・テーマと自分自身のつながりをもっと言葉にした方がよい
・課題からスタートにしないこと
・仮説と検証を行って、課題が変わってもいいはずなのに変わらない（「課題」という言葉を使わない方がいいのではないか）
・発表時間５分は短い

【Try（来年やってみたい）】
・最終発表会で地域の人とであるのではなく、常にオー

プンな関係を作る
・学年を超えた交流・コラボ
⑦ 結果および今後の展望
・今年度もコロナ感染症対策のため、予定していた活動ができなくなるケースがあった。昨年と異なっている点は、Zoom などの新たなオンラインのツールを手に入れた点である。このツールを積極的に利用し、他県の高校生とオンライン交流会を行った探究やマインクラフトを利用した探究、分科会発表の様子をライブ配信で行う探究など新機軸を導入した探究なども見られた。
・この発表会は 1 期生から始めて今回が 5 回目であるが、会を重ねるごとに発表件数が増え、調査だけでなく課題解決のための実践を進める生徒の割合が増えており、質、量ともに高まっている傾向が見られる。一方で、現実的に地域の外に出て課題解決のアクションの総量は絶対的に少ない。また、海外研修がここ 2 年国内の代替研修に切り替わり一定の成果は出ているが、海外研修を通じて得られる世界の課題と地域の課題を繋げて考える視点が今回の探究で見られなかったことは次年度の課題ともいえる。
・外部参観者向けに Zoom による配信を行ったが、取組そのものに対しては好意的な意見が多かった。また遠方からの参加者も多く遠隔配信のメリットを活かすことができた。一方、映像や音声の質等、配信の技術的な点は課題が多かった。次年度以降は直接来場いただくようになることを願うばかりであるが、今回培った配信ノウハウは今後も生かしたい。
・3 年生はこの後、論文作成や探究活動を仕上げる期間に入るが、それらの質を高めるための機会として、全体として今回の発表会は有効に機能したと思われる。また外部の方に本校の活動の様子を理解していただく場としても効果が大きかったと思われる。次年度以降も、定着した取組として実施していく。

２．４　　海外研修・国内研修

２．４．１　ドイツ研修

本校では、開校年度からドイツを訪れている。東日本大震災によって、地域課題の先進地ともいえる状況に陥った福島県・双葉郡が、どのような街づくりを行っていくべきかについて考え、帰国後の学びにつなげてきた。新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、2019 年度のチーム(５期生)を最後に渡航見送りとしてきたが、今年度３年ぶりに現地渡航することができた。

１．研修の概要

(1)研修の目標・趣旨

本校における高校一年次ドイツ研修では、地方創生イノベーションスクールの一環として、Think Green をテーマとし、2030 年に問題となる地域の課題と共通する世界的な課題についてアクションを提言するため、平成２８年度にミュンヘンの Ernst Mach Gymnasium 校と交流を行った。それ以来、同校とはオンラインも含めた交流を毎年継続している。本校では未来創造探究として、原子力災害からの復興や持続可能な地域づくりについて、それらを福島のみの課題ではなく、全世界が共有するべき「持続可能な社会づくり」として探究している。ドイツの環境都市フライブルクを訪問することにより、将来起こりうる世界の難題に向き合い、持続可能な社会をめざして未来を創造していく一歩としたい。

(2) 派遣期間 令和５年１月５日（木）から
１月 14 日（土）　８泊 10 日

(3) 訪問先　ドイツ　フライブルク・ミュンヘン

(4) 参加メンバーと役職

役職	番号氏名
リーダー	1514 谷 聖彩
副リーダー	1503 猪狩 佑紀
副リーダー	1522 林 佳瑞
書記	1317 佐々木 大斗
書記	1327 山形 遥
スケジュール管理	1326 八木 香練
スケジュール管理	1504 伊藤 珠弓
アポイントメント	1508 木村 彩乃

引率団：
齋藤 夏菜子(英語科・企画研究開発部副主任)
塩田 陸(英語科・高校１学年担任・企画研究開発部)

(5) 研修内容

①フライブルク市訪問

ドイツにおける環境や再生可能エネルギー政策の利点や問題点を探り、日本の今後のエネルギーのあり方を考察する。

②ERNST MACH GYMNASIUM 校の生徒との交流

ホームステイをしながら現地の高校生と持続可能な社会を支えるためのエネルギー政策について学び、未来の社会を作る人材としてお互いに研鑽する。また、現地の高校生との交流活動において、福島の現状を伝えることを通して、福島の安全・再生の歩みを正しく理解してもらう。

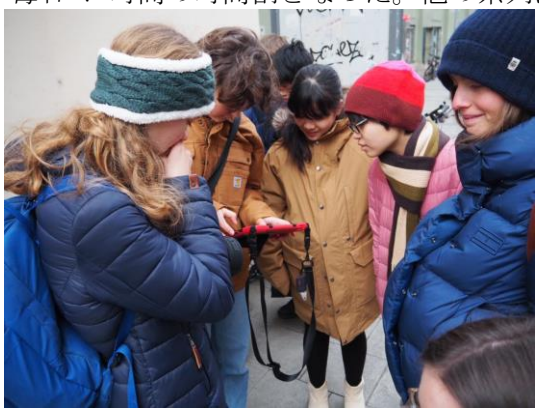
(6) 本プロジェクトにおけるふたば未来学園ルーブリック達成目標

B 英語活用力・E 他者との協働・F マネジメント力・I 能動的市民性の長期的支援での上昇。
（帰国直後の U カルチャーショックや、メタ認知が進むことによる一時的な下降。ドイツ研修と探究活動の接続を実感した後、緩やかに上昇することを想定。）

２．プロジェクト開始当初の課題感

(1) 研修時間の確保

今年度の新カリキュラムから、アカデミック系列が毎日 7 時間の時間割となった。他の系列は従来通りのカリキュラムであるため、集合研修の時間の捻出をすることや、学校内外の授業外の活動との折り合いをつけることはこれまで以上に困難を極めることになる。また、引率教員が２名体制となり、校内の他の業務により毎回の事前研修に参加できないことが多くなることが想定された。



(2) 探究活動との接続

今年度のカリキュラムより、地域創造と人間生

活を前期週 2 時間＋夏季休業登校日で 2 単位履修し、後期に総合的な探究の時間を週 2 時間で 1 単位履修することとなった。実質半年程度の探究活動の前倒しにより、本研修は「生徒の中に探究的な学びに向かうレディネスを醸成する良質なインプットと交流のための海外研修」から、従来の本校 NY 研修が担ってきた、「探究活動の学びの深化と発信・議論の成果の還元」を部分的に担うことになった。事前・事後研修の中で、探究活動との自然な接続が望まれる。

(3) 諸活動との概念的接続

授業時数増による放課後活動の時間的制約により、校内外で多様な活動や事前・事後研修での生徒の学びが単発的になることが予想された。諸活動や教科での学びどうしをつなげ、学びの連鎖をファシリテートしていく必要があった。

(4) 参加生徒の系列を超えた学び

上記に加え、参加研修生の系列がアカデミック系列かつ一貫生のチームとなったことにより、参加研修生の議論から多面的・多角的な考察の欠落に気づかせる場面が必要となった。

３．研修実施体制

本研修の事前研修は全員での集合研修を原則とした。渡航生どうしで都合を調整し合い、リーダーを中心に常に最大数が参加できる研修を心掛けた。実際に集合する場合は、対面で最大限の効果が発揮される哲学対話などの方法を使って議論をした。事務的な連絡やデータの作成は参加メンバー合意の上で分担をし、オンラインで効率よく済ませるようになった。

(1) 哲学対話

渡航生徒は併設中学からの一貫生であり、中学校時代に行った哲学対話の文化が根付いている。哲学対話とは対話の参加者が輪になって問いを出し合い、一緒に考えを深めていくという対話のあり方である。渡航メンバーは、事前研修の中でこの対話を自然と行うことができていた。

ドイツ研修のメンバー初顔合わせでは、探究活動同様にそれぞれ自分なりの「問い」を考えて研修に臨んでほしいということを伝えている。ドイツ人作家のエーリッヒ・ケストナーの『動物会議』を読み、その内容をもとに 2 度の哲学対話を行った。1 度目は本校にて、10 月 14 日（金）に実施し、神戸　和佳子氏が来校し、対話に参加した。2 度目は10月28日（金）東京立川の複合文化施設Play！内の「どうぶつかいぎ展」で、高橋　源一郎氏・神戸 和佳子氏と哲学対話を行った。

(2) 教科教員による特別授業

12 月 26 日には、地歴科の教員によるドイツの歴史と文化の特別授業を行なった。これは、参加生徒が読んだ書籍などを元にチーム内で問いを吟味し、担当者とのアポイントも含めて実現したものである。

(3) Canva と Zoom の活用

英語科の担当者が事前に教育者用のアカウントをとって授業で活用していたが、本研修の参加生徒も Canva に招待した。EMG のホームステイの受け入れ家庭の学生に向けて、自己紹介のビジュアル資料を作成して交換した。互いの情報を見ながら、Zoom を通じてオンラインで事前交流を行い、実際のホームステイに備えた。これは、コロナ禍で渡航を断念しながらも、オンラインホームステイなどを通して交流を繋いできてくれた上級生のおかげだと言える。(海外研修で訪問した学校では、あらゆるアプリケーションを用いたリモート授業のノウハウが授業に生かされており、生徒が便利な技術を駆使してやりとりをしていた。Google のアプリセットも含め、事前研修で精通していてよかったと感じることが多くあった。)

(4) 英会話・ドイツ語会話(校外人材)

①過年度 AFS 留学生との会話

本校では、過去 5 年間、AFS アジア桟プロジェクトを通じて、アジアの若者たちを受け入れ、学校生活を送るプログアムを実施してきた。本校での生活を送った後は、海外の大学に進学する学生が多く、1 期生として本校で約半年交流したマレーシアの学生がドイツに留学している。ドイツでの生活のコツなどについて Zoom でインタビューを行なった。

②旧職員によるドイツ語会話

本校には、過年度、ドイツ語に詳しい教員が在籍していた。冬季休業期間を使って、ドイツの生活に最低限必要な会話表現のインプットを行った。

③ALT による英語会話

本校の ALT による英会話教室も行った。自分たちで入国審査の場面などを想定し、ALT によるスキット練習などを行った。

(5) 文化交流

EMG との打ち合わせの中で、茶道や日本料理をふるまう計画を立てた。そこで、生徒たちは国語科の教員に依頼をし、お茶のたて方を学んだ。また、他国の若い生徒も飲みやすい飲み方についても考えてもらい、ALT にふるまった。

(6) Facebook

海外研修や探究活動に関する親和性の高い Facebook を活用した。用途の例として、研修日程の共有、研修内容や写真・動画の共有、Facebook messenger が挙げられる。生徒チームが自走していく上では使い勝手が良く、教員の目が届くところで校内外の関係者との情報共有がしやすい。

４．研修の成果

(1) 対話文化の根付き

中学段階で哲学対話を行ってきた参加生たちは、研修開始当初から、議論の際に自然と円を作って対話を行ってきた。参加生徒選抜の前からドイツに関する文献を読み、目的を持って研修に応募してきた生徒もいるが、チームでの議論や、さらなる文献購読により、より真理に迫る対話を実践することができた。現地渡航がかない、なぜそのような対話が必要であるのかについてさらに肌で感じて帰国した。

帰国後は、地域に、哲学すること・対話をすることをもたらす探究的な問いを立てた生徒が多くいた。

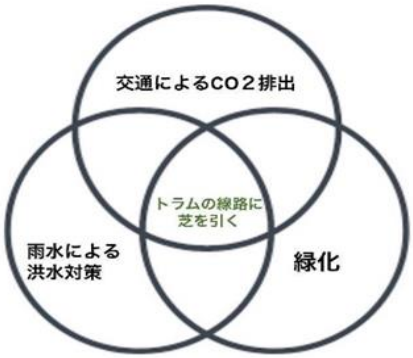
(2) Open-minded な姿勢と能動的市民性・アクションの創発

帰国後、目の前にある物事が自らの探究活動や進路活動につながるか否かがわからなくても、積極的に学校内外に活動の範囲を広げ、挑戦をする姿勢が見られた。例えば、他地域のツアーに参加申し込みをする生徒や、地域住民に対面・オンラインで積極的にインタビューを行う生徒が出始めた。特に象徴的であったのは、本研修参加者の中から生徒会活動の中で提案をし、中高全生徒を巻き込んだウクライナ支援のための講演会とメッセージの作成を実現できたことである。このことは、テレビでも報道され、後日、本校運営指導委員でＯＥＣＤ教育スキル局シニア政策アナリストの田熊 美保氏からも称賛の声をいただいている。

例えば、他地域のツアーに参加申し込みをする生徒や、地域住民に対面・オンラインで積極的にインタビューを行う生徒が出始めた。特に象徴的であったのは、本研修参加者の中から生徒会活動の中で提案をし、中高全生徒を巻き込んだウクライナ支援のための講演会とメッセージの作成を実現できたことである。このことは、テレビでも報道され、後日、本校運営指導委員でＯＥＣＤ教育スキル局シニア政策アナリストの田熊 美保氏からも称賛の声をいただいている。

(3) 複眼的思考の定着と発散収束の螺旋的思考

生徒は帰国後に事後研修として、レポート作成を行った。報告会などの発表は日程を調整中ではあるが、作成の進んだレポートの内容からは、一つの問題につき、単一目線からの解決方法ではなく、問題をあらゆる学問分野から学際的に策を考えることができるようになっている。複数の問題を一度に解決するモデルを作り、双葉郡から実践を始めていこうと考える生徒も出始めている。(下図)



(4) ルーブリックの生徒記述より

今後 B 英語活用力・E 他者との協働・F マネジメント力・I 能動的市民性の上昇は十分に見込まれるが、生徒ルーブリック記述とでは、以下のようなものがあった。(原文ママ)

B 英語活用力

・ドイツの子や先生とは、移動時間やステイ中に原稿が無い会話も出来たが本当の英語圏だとそうはいかないと思っている部分がある。

・ドイツ研修でドイツの高校生と交流をする時に、福島のことや私たちの学校のことなどについて準備した英語で発表し、その後簡単な質疑応答をしたり感想を話して貰ったりした。お茶会の時やホームステイの時にも相手に気になることを質問したり、逆に質問に答えることが出来た。

E 他者との協働

・ドイツ研修メンバーのチームワークは良いものだった。一言で「良かった」とまとめてしまうのは恐れ多いが。もちろん弱音を吐く時もあったし情報伝達が噛み合わない時もあったけど最後見えた景色はチームワークあってこそかなと。

・私は部活動に所属しておらず、放課後の時間は空いているため、プレゼン作成を自分のペースで進めることができた。だが部活動に所属しているメンバーは放課後自分で使うことのできる時間が限られているため、作成を計画的に行うことが難しい仲間もいた。昼休みや部活動のない放課後の時間を利用し役割を分担してパワポ、原稿の作成を進めてきた。またホームステイ期間はホストファミリーの家事の手伝いを行った。各家庭にそれぞれの生活スタイルがあるがそれを海外で経験したことにより異文化交流を通して他者理解にもつなげることができたと思う。

F マネジメント力

・ドイ研メンバー全体でなら適切な役割分担なども出来ていたが、個人としては計画立てるのもマルチタスクも苦手なのでまだ５段階評価の 2。

・指示をもらわないで行動するのはまだこわいと思う。

・レベル４に上がるためには「作業を適切に役割分担する」能力を身に着けるべきだと感じている。今回の研修では一人一人のスケジュールがある中で事前研修等を組み立てていたためどうしても偏りが出てしまった。

I 能動的市民性

・ドイツ研修の目的に他者還元があり、私も大切にしている。変革者の一歩として報告会で学校の人たちに良い影響を与えたい。

・研修参加前までは社会問題を他人事として捉えていたわけではないが、自分自身にできることを考えたりその問題に対して自分の考えを持ったりすることは、なんとなくでしかできなかった。「動物会議」の哲学対話を通して、日常にある問題を深めて考えることを始めとし、現地へ行き様々な問題に触れていく中で、日本に置き換えて考えてみた。ドイツの学際的な考え方を浸透させるべきだと思い今の探究内容に至っている。ドイツの課題解決をする際の根本的な考え方を学べたことは、自分の価値観を見直すきっかけとなったとともに、社会問題や身近なことに当てはめて考えてみると視野を広めることができると思った。学際的な考え方を行うことは「社会の主体としての意識を持ち、社会がより良くなるための考えを持つことができる」に繋がると感じた。

２．４．２　ニューヨーク研修

本校が SGH 指定校であった期間から続く本事業は、新型コロナ感染拡大に伴い中止や代替を余儀なくされていた。SGH 指定最終年度となった 2019 年度（本校４期生）およびグローカル型初年度の 2020 年度(本校５期生)、そして昨年度(本校６期生)も渡航を断念してきた。このような状況のため３年に渡って国内での代替研修を実施してきていたが、今年度（本校７期生）は３期生以来４年ぶりにニューヨーク現地への渡航が可能になった。

（１）チームビルディング

本研修は、教員主体の語学研修や、探究活動の広報活動とは異なる。地球市民としての生徒たちが、能動的市民性を大いに高め、地域や世界に貢献していくために生徒主体で進めるプロジェクトである。

本研修のミッションを自覚し、国際社会で提言をしたいという意志を持った８名の生徒たちが選抜される。(これまでは最大 12 名の生徒を選抜していたが、今年度は渡航に関わる旅費が例年と比較しても非常に高くなっており、人数減に至った。) 原子力災害からの復興にかかわる自分たちが、世界の人々とともによりよい未来を目指すためには、どのような相手と議論をし、どのように提言をすべきかから生徒たちは議論を重ねる。研修前後には積極的に地域と学校に学びの成果を還元する。

参加者８名を選抜する際には、以上の観点を踏まえた内容および自分の探究と地域・世界とのつながりについての志望理由書を重要視し選抜した。

これまでと大きく異なる点として、3 年間渡航を断念してきた生徒たちの思いを受け継ぎ、強い使命感を持って研修に臨む必要があるということを全員で確認した。

（２）事前研修①（伝承館研修、語り部交流会）

期日：令和４年 12 月 21 日(水)
　　令和５年１月 23 日（月）

令和４年度「震災と復興を未来へつむぐ高校生語り部事業」の一環として、NY 研修参加生徒７名で東日本大震災・原子力災害伝承館を訪れ、当時の被害状況への理解を深め、福島の現状の課題について把握した。

上記イベントに参加できなかった生徒１名について、後日伝承館で行われた令和４年度「震災と復興を未来へつむぐ高校生語り部交流会」にオンライン参加し、プレゼンテーションを用いて自身の被災体験と現在の学校生活について発表を実施するとともに、県内高校生の被災体験や取り組みについての発表を聞いた。

これらの事前研修は後述する事前研修②（会津大学留学生との交流）に向けた準備と NY 現地で発表するプレゼンテーション作成において効果的であった。

（３）事前研修②（会津大学留学生との交流）

期日：令和５年２月 20 日（月）

会津大学主催のプログラム「2022 年度東日本大震災・原子力災害伝承館と福島ロボットテストフィールド等視察」へ参加した。同プログラムでは上記２つの施設に加えて請戸小学校を訪れ、福島が抱えてきた課題と復興への取り組みを客観的にとらえ、今後革新的な未来のために何ができるかを実感することを目的としている。

会津大学からは 13 名の留学生を含む 21 名が参加し、本校 NY 研修生徒８名、留学生２名と合わせて計 31 名がグループに分かれて研修を行った。

英語を用いたコミュニケーションのみならず、外国人から見た福島の印象や、専門分野を学ぶ大学生ならではの思考から未来の可能性について共に探る良い機会となった。

浜通り地域の課題を発表する留学生ら（20日、南相馬市で）

留学生と被災地の課題語る

日本人学生ら　浜通り震災遺構見学

国際的な視点から本県の課題を解決しようと、会津大とふたば未来学園高（広野町）の学生と留学生ら30人が20日、浜通り地域の震災遺構などを訪れた。

インドネシアやスリランカ、米国などの留学生15人と日本人の生徒・学生15人の計30人が参加した。

学生らは、東日本大震災・原子力災害伝承館（双葉町）や震災遺構・請戸小学校（浪江町）を見学したあと、福島ロボットテストフィールド（南相馬市）で、浜通り地域の課題を解決するアイデアを発表するワークショップを行った。

会津大学大学院博士2年で米国出身のジェームス・ピンクルさん(30)は、初めて伝承館などを訪れたといい、「地域に人が戻ってきていない状況は、テーマパークなどの人々が楽しめる施設を造れば解決できるのではないか」と話した。浪江町出身で、ふたば未来学園高2年の大越斗輝さん(17)は「外国人と被災地の課題を英語で話し合う機会は貴重だった。勉強になった」と喜んでいた。

読売新聞
（2023年２月21日）

（４）事前研修③（その他）

期日を問わず、以下の内容を事前研修として実施した。

・英語コミュニケーションのトレーニング
・課題図書『This Very Tree』(Sean Rubin 著)
・課題図書『災害ユートピア』(Rebecca Solnit 著)
・課題図書　教育関連書籍を各自１冊選択
・社会科教員による 9.11、アメリカ史講義
・映画『1/10 Fukushima をきいてみる 2022』鑑賞会＆交流会参加
・小玉直也氏（NPO 法人アースウォーカーズ）との懇談
・NHK Special 混迷の世紀 第９回「ドキュメント国連安保理～密着・もうひとつの“戦場”～」視聴と哲学対話
・UNIS-UN 2023 Conference Debate 練習

上記に加えて、NY 現地でのプレゼンテーションに向けたスピーチ作成、スライド作成、プレゼンテーション練習、UNIS-UN Cultural Showcase で披露するダンスの練習等を実施した。

（５）ニューヨーク現地での研修

期日：令和５年３月 10 日（金）～18 日（土）

活動内容：

① 国際機関関係者との意見交換

国連日本政府代表部による「国連と SDGｓ」に関する講義を聞き、福島の私たちが持続可能な世界の実現に向けて何を為すべきなのかを考える。また、各国の国連関係者に福島復興に向けた自身の実践について発表を行い、持続可能な世界の実現について意見交換を行う。

② UNIS-UN での各国同世代との交流

国連職員の子弟等が通学する UNIS（国連国際学校）が主催し、各国の高校生が参加する生徒国際会議 UNIS-UN（会場：国連総会会議場）に参加し、各国の同世代とグローバルな課題について議論を行い、交流する。（2023 テーマ：Turning the Page: A New Chapter in Education）

③ 現地 NPO と連携した同世代生徒意見交換

現地の NPO と連携し、NY の多様性を包含するコミュニティ形成について学ぶとともに、市内在住の同世代に福島復興に向けた自身の実践について発表し、グローバルな課題について意見交換を行い、交流する。

④ 現地行政職員との意見交換

NY 市の職員に向けた自身の実践について発表し、福島と世界の課題解決について意見交換を行う。

⑤ シティズンシップに関するフィールドワーク

The Apollo Theater や Schomburg Center for Research in Black Culture で、NY における黒人文化の歴史と、その記憶の伝承等について学ぶ。また、9.11 Memorial Museum の視察と意見交換を行う。

⑥ 生徒たちの計画による自由研修

多様性と能動的市民性が息づくニューヨークの文化を体感する。また、異国の地で行き先や移動手段も自分たち自身で計画し行動する経験を積む。

プレゼンテーション発表内容：

『Paying it forward from Fukushima』

2011 年３月の東日本大震災・原子力災害発生時の自分たちの体験とふたば未来学園入学後に学んだことを踏まえて、次世代への「恩送り」として地域社会あるいは世界に向けて活動していることを紹介し、福島の現状の課題を解決に導くための対話の場（Open Dialogue）の必要性を訴える内容である。　※Canva でスライド作成

３月１０日（金）

3/10（金）10:05 発の飛行機に乗り、12 時間かけてニューヨークへ向かい、午前 9:00 にニューヨークに到着。生徒の中には海外渡航経験がある者とそうでない者がいたが、ニューヨークは全員初めて訪れた。

初日は、NY 市役所の Chisato Shimada 氏、同僚の Christopher Haight 氏、Naiyiri Booker 氏をホテルの一室に招き、用意したプレゼンテーションを見ていただき、対話の時間を設けた。

Christopher 氏と Naiyiri 氏は NY 市役所公園局の水に関わる（川、池、海、湿地等）研究者の方々である。プレゼンテーション内で言及した福島の原発処理水の問題を中心に、生徒の探究活動のヒントになるようなアドバイスを多数いただいた。

午前 0:00（日本時間 3/11（土）14:00）、ふたば未来学園では震災追悼式が執り行われており、生徒たちは zoom をつないで式へ参加し、黙祷を捧げた。

３月１１日（土）

２日目は黒人文化の原風景が残るハーレムでの研修である。国連ユース代表で NPO を経営されている Jadayah 氏と合流し、まずは The Apollo Theater を見学した。Mr. Apollo こと Billy Mitchell 氏が見学ガイドを務め、The Apollo Theater の歴史や自身の生い立ち、The Apollo Theater という施設は何なのか、ハーレムはどういう街なのかについてお話をいただいた。

The Apollo Theater のステージは Stevie Wonder や Michael Jackson（The Jackson 5）など名立たるパフォーマーたちがパフォーマンスをしてきた長い歴史がある。Mr. Apollo によって一部の見学参加者がステージに立ってパフォーマンスをすることを求められたため、後日参加予定の UNIS-UN の Cultural Showcase のために練習してきたダンスを生徒全員で披露するという貴重な体験をすることができた。

その後はモスクの外観を一目見てから、African Market の散策を実施。セネガル出身の方が開いた店に案内していただき、Africa in Harlem という取り組み・考え方や、黒人やアフリカに住む人々に対する偏見についての話を聞く機会に恵まれた。

午後は黒人文化の歴史のアーカイブが残る Schomburg Center の見学と、ハーレムの学生たちとの交流を実施した。アイスブレイクのゲームで親睦を深め、生徒が準備したプレゼンテーションを発表した。ハーレムの学生たちは最初は福島のことをほとんど知らなかったが、発表を通して、福島が直面している風評被害や処理水の問題と、黒人差別の歴史やミシガン州フリントの水汚染公害問題を重ねて、共感しながら真剣に聞いてくれた。発表後にも多数のコメントをいただいた。

ホテルに戻ってひと段落した後、プレゼン発表と The Apollo Theater でのパフォーマンスを動画で見て振り返りを実施した。

３月１２日（日）

３日目は初めて自分たちで地下鉄を使って移動することとなったが、逆方向の列車に乗ってしまった。全員で協力しながら丁寧に確認すること、誰かに任せっきりにしないこと、分からなかったらとにかく誰かに聞くことの大切さを学んだ。

到着後、9.11 家族会の Meriam 氏と１日目もお世話になった Chisato Shimada 氏の案内で World Trade Center 周辺の散策を行った。Meriam 氏は写真を見せて当時を振り返りながら、9.11 の出来事について丁寧に説明してくださった。

9.11 の事故から蘇った World Trade Center 一帯とニューヨークシティ全体の復興のシンボル"Survivor Tree"のもとを訪れることができた。この木については事前研修で絵本"This Very Tree"を全員が読んでおり、実物を目の当たりにして感動の声が漏れた。また、Saint Nicholas Greek Orthodox Church & National Shrine を訪れ、礼拝堂のモザイク画を鑑賞したり、追悼のロウソクをお供えしたりした。

9/11 Memorial Museum の視察では、事前研修で複数回訪れた東日本大震災・原子力災害伝承館と同じ役割を有する施設の見学を通し、歴史を後世へ伝え残すこと、それを学ぶことの大切さを改めて感じることができた。

いったん解散し、3 班に分かれて自主研修を行った。各班がそれぞれ自分たちで行先を決め、時間通りに目的地へたどり着けるように行動した。ニューヨークの観光名所を訪れたり、現地の人々とコミュニケーションを取ったりする体験を通して、海外での生活を肌で感じることができた。

集合後は、本校の NY 研修で縁のあるロバート柳澤氏のご自宅を訪問した。Meriam 氏を始めとする 9.11 家族会の方々にも集まっていただき、生徒によるプレゼンを実施した。家族会の方々は真摯に生徒のプレゼンを聞き、多数の質問とコメントをしてくださった。用意していただいたご馳走をいただく中で、日本に留学予定の学生とコミュニケーションを取ろうとする生徒の姿も見られた。

ホテルに戻って反省会を行った。生徒たちは「対話の大切さ」をプレゼン発表しているが、これまでの３日間で経験した言いたいことがあっても英語で答えられないもどかしさや、周りの様子を窺って自分から一歩を踏み出せなかったこと、聞かれていることが分からなくなってしまったこと等を振り返り、自分たちがこの研修を通してどう変わりたいか、明日からの取り組み方や姿勢について考え直した。振り返ると、この日の反省会が後の研修内容に大きく良い影響を与えたと思われる。

３月１３日（月）

４日目、昨晩の反省を踏まえて朝早くに集まり、学んだ内容の共有と、本日から始まる UNIS プログラムの内容の予習をした。

午前中は国際連合日本政府代表部を訪問し、志野光子大使、大嶋勝公使のお二方にご挨拶をさせていただいた。生徒は事前研修として視聴した NHK スペシャル 混迷の世紀 第９回 「ドキュメント国連安保理～密着・もうひとつの“戦場”～」の感想と、それを踏まえた対話の内容、自分たちの考えと NY Project の取り組みについて報告した。志野大使と大嶋公使からは激励の言葉をいただき、その後生徒の探究活動に関する質問を基に対話を行った。

続いて児玉啓佑参事官にご挨拶し、国連やSDGs、児玉参事官自身の取り組み等についてのブリーフィングに参加した。プレゼンテーション披露では「想像以上に素晴らしいものでした」と感想をいただき、プレゼンをより良くするためのアドバイスや処理水問題への言及、また生徒からの質問に対して、探究活動への助言やチームプロジェクトにおいて大切にすべきことなどを教えていただいた。

午後はUNIS（United Nations International School）のプログラムに参加した。Cultural Showcaseには各国の高校生が参加し、自国の文化を紹介するパフォーマンスを披露した。本校生徒も事前に申し込みをしており、何度も練習したダンスで会場を盛り上げることができた。生徒は国籍が異なる相手とでも感動を共有できる楽しさや達成感を感じたようだ。

その後は生徒の希望に応じて２つのWorkshopへ参加し、周りの外国人生徒とコミュニケーションを取ったり、協働して作品を作り上げたりした。一回目のWorkshopで上手くいかなかったことを踏まえて、二回目では勇気を出してアクションを起こすことができたという生徒の話も聞かれ、大きく成長を感じる一日となった。

３月１４日（火）

５日目は国連国際学校UNIS（United Nations International School）が主催する生徒国際会議UNIS-UNへ参加した。世界中の学生が国連本部のGeneral Assembly Hall（総会議場）に集い、講話を聞いたりDebateをしたりするプログラムである。本校はGERMANYとGHANAの席に割り当てられた。

【Day1 Keynote Speaker（講演者）と概要】

・Mr. Christopher de Bono, Deputy Director responsible for Communications, UNICEF　気候変動によって教育の機会を奪われる子どもたち

・Sheikh Manssour bin Mussallam, Secretary-General, Organization of Educational　教育で何を学ぶべきか

・Dr. Lauren Rumble, Associate Director Gender Equality for UNICEF　教育のジェンダー平等、女性の教育機会均等について

生徒は英語で長い講話や議論を聞き取ることに苦労していたが、分からない単語をリストアップしたり、スマートフォンの音声入力機能を駆使して文字起こししたりしながら、必死に食らいつく姿が見られた。

Day1のDebate Motionは"Incorporating AI into education will have positive or negative effects"であった。事前に選ばれた学生が議論するのを聞き、最終的に投票を行う。事前研修でALTの協力の下、立場を決めて理由や根拠を考えてきたこともあり、いくつかの例や単語について聞き取って自分なりに考えることができたようだ。Day1プログラム終了後は国連本部ツアーに参加し、安保理の会場等、国連本部の内部を見ることができた。

ホテルに戻り、明日のDay2にどう臨むかを全員で考えた。学んだ内容を記録していくことよりも、リアルタイムで言われていることを理解・共有してみんなで考えていくということを目標に、誰が何を担当するか、どのような配置で着席するかを決め、よく耳にした表現や単語の意味を確認した。

３月１５日（水）

14日に引き続き、UNIS-UN Day2へ参加した。

【Day2 Keynote Speaker（講演者）と概要】

・Dr. Roser Salavert, Co-Founder and Director of the NYS/NYC Professional Development　「他人の靴を履く」思いやりのある教育システム

・Soraya Fouladi, Founder and CEO of Jara　e-ラーニングの普及、The Jara Unitの紹介

※上記に加え、Student Moderated Panel Discussion

反省を生かして席の配置を変え、各自が必死に自分の役割を果たそうとしている姿が見られた。同じテーブルに座った羽黒高校の生徒と先生も巻き込んで、考えを深めるために一緒に対話をした。これまでの準備や事前研修で学んだ単語・表現、毎晩反省を重ねて新たに増えた語彙のおかげで、生徒からも「今こういう話してたよね」など話の内容を確認しようとする声が聞こえてきた。

Day2のDebate Motionは"Education should be private rather than public."であった。結果的に指名されることはなかったが、本校ならではの視点から様々な要素について考え、質問を準備して挙手することができた。３期生ぶりのUNIS-UNの現地参加はハードルの高いものだったが、生徒は色々な新しい経験をしたり、教育の世界的な問題について自分事として考えたりする機会を得ることができた。

夜は２日目に一度訪れた The Apollo Theater で Amateur Night というライブイベントを鑑賞した。子供から大人まで幅広い年代の挑戦者が性別・人種も関係なく自らの才能を発揮するためにステージに立ち、歓声やブーイングを浴びるという、アメリカ・ニューヨークの大衆文化を肌で感じる良い経験となった。

ホテルに戻った後は、プレゼンテーションの最終発表に向けて、児玉参事官のアドバイスを参考にプレゼン発表の原稿とスライドを調整した。生徒は眠気に抗いながら声を掛け合い、助け合いながら最終調整に取り組んだ。

３月１６日（木）

最終日となる７日目は、国連本部Civil Society UnitのHawa氏や、UN Youth Representativesの皆様に、福島の課題と世界の課題を重ね合わせつつ、持続可能で平和な世界の実現に向けた提言を盛り込んだプレゼンテーションを行った。発表を終えてスタンディングオベーションをいただき、生徒からは泣きそうになったという感想を聞くことができた。

国連関係者の方々は、プレゼンを通してふたば未来生の取り組みや福島・日本の現状をよく理解できたと仰っていた。また、発表内容について、対話・交流の場を開くことの大切さ、そしてそこから生まれてくる新たな分断に立ち向かうための助言をくださった。生徒たちのこれからの取り組みに期待し励ましてくれる声かけの数々に、生徒たちは安堵しながらも身の引き締まるような思いだったと思われる。

現地での研修プログラムを一通り終えて、生徒からは「色んな経験と失敗ができて良かった」「周りのメンバーを尊敬できた」「人生が変わった」という感想が聞かれた。帰国後は、学んだことを報告・共有・実践していく使命を果たすことになる。ひとまず４年ぶりのニューヨーク現地での研修は成功に終わったと言えるだろう。

※３月１７日（金）、３月１８日（土）は移動日

（６）成果と課題

チームビルディング

メンバー選抜において、自分の探究と地域・世界とのつながりについて志望理由書に書く必要があったことで、全員が探究活動の内容を深く振り返ることにつながり、それぞれの取り組みを深化させようという意識づけをすることができた。また、顔合わせの際に、3 年間渡航を断念してきた生徒たちの思いを受け継ぎ、強い使命感を持って研修に臨む必要があるという話をしたことで、メンバーに責任感が生まれた。ドイツ研修に参加した者とそうでない者、海外渡航や国際交流経験の豊富な者とそうでない者等、多様なメンバーを選出したことで生徒間での学び合いが活発に生まれた。結果的に８人という少人数編成になったことでチームの結束力が高まりやすく、仕事をスムーズに分担することができた。しかし、学校や地域への学びの還元、学び合いの効果の最大化を考えると人数を確保することも考慮すべきである。

事前研修

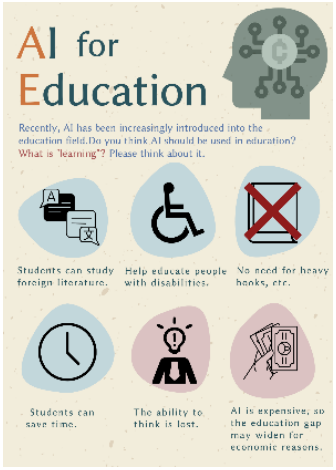
事前研修は現地での活動を有意義なものにするべく、大きく分けて、①プレゼンテーション作成のために福島・世界のことを知る、②ディベート等を含めた英語によるコミュニケーション・思考の強化という２つの軸で行われた。講義やフィールドワーク、多くの対話の機会

を通して、グローバルな視野を持つこと、世界の諸問題についての基本的な知識を身に着け、関心を持てるようになるという目的は達成することができた。

また、各自の英語トレーニング以外は基本的にチームで協働して取り組むことで、チームプロジェクトの進め方を学び、実践するという経験が得られた。これまでの研修等では実現できなかったレベルでの「チームでの協働」ができたということは生徒全員の総意のようである。チーム間での連絡共有に Facebook グループを使用したこと、プレゼン等の作成に Google Document や Canva を使用したことで、アーカイブとしての機能を有しつつ同時作業で効率的にプロジェクトを進めることができたこと、関係教員からのフィードバックが容易であったことも１つの大きな成果である。

また、事前研修の内容に加えて、UNIS-UN 2023 のトピックであった教育の問題に関連するポスターを作成する課題・授業を行ったことは、研修に参加していない生徒も巻き込んで思考を深めながら、研修生徒の学びを他生徒へ還元する役割も果たしていたと言える。

生徒が作成したポスター



課題として、旅行費用や日程の調整に時間がかかったことが大きく影響しているが、準備時間に余裕がなく、書籍を読み込んで内容を深掘りすることまではできなかった。また、英語力改善のためのトレーニングは自主性に任せる形になり、十分に実施できなかった点にも課題が残る。

ニューヨーク現地での研修

全体を通して、英語でのコミュニケーション（特にリスニング）で困難を感じる機会は多く、生徒は英語学習に対する強い動機付けを得ることとなった。また、普段の授業においても、ただ原稿を読むようなものではなく、ディベート等で必要とされる即興性と論理的思考力に英語活用力を組み合わせたトレーニング等、より実践的な英語力を醸成する内容を考案していく必要性が感じられた。一方で、教科書で学ぶ基本的な英文こそがコミュニケーションの核となるということも併せて意識づけできると良いと感じた。しかし、生徒が研修の中で積極的に相手に話しかけたり言葉を発しようとしたりする姿が見られるようになったことは大きな成果である。

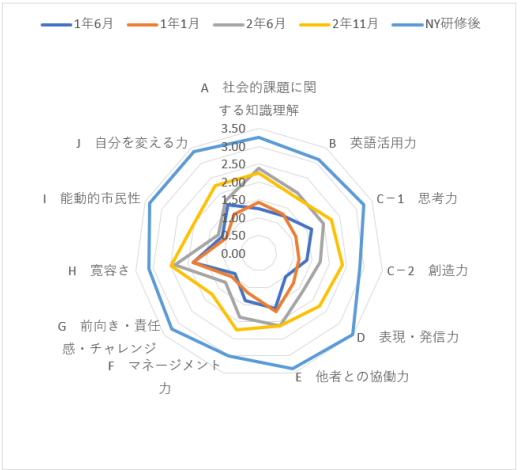
研修終了後に取得したルーブリックの自己評価からは、生徒が NY 研修を通して自身を大きく成長させることができたと感じていることがよく分かる。下記の資料は NY 研修に参加した 8 名の生徒のみを対象とした、1 年次以降から取得しているルーブリックの自己評価の平均の推移である。NY 研修後の振り返りでは、すべての項目が大きく数値を伸ばしており、生徒自身も最も伸びたと感じる能力として特に B(+1.25)，E(+1.25)，G(+1.50)，J(+1.13)を挙げている。研修を通して得られたモチベーションを高く維持して、今後の事後研修や学校・地域への学びの還元をしていきたい。

【生徒のルーブリック反省・感想】（一部抜粋）
・「研修の中でメンバーの良いところをたくさん見つけられたし協力できた。」
・「最初は何を言っているのかわからなくて会話も避けていたけど、後半になるにつれて聞き取れるようになっていった。」
・「プレゼン中、聴衆が良い反応をしてくれた事がとても嬉しかったため、これは自分もできるようにしたいと思い、メンバーと一緒に挑戦していた。」
・「ニューヨークの人にとっては相手の時間を無駄にしないことが礼儀（日本人の謙虚な性格は時間が無駄になる）と学び、テキパキと接するようにした。」
・「自分がやっている探究が、世界で起きている問題と共通点があることに改めて気づかされ、本当に全部他人事じゃないんだと思った。」
・(後輩へ)「心から頑張ってよかったと思える。迷ってる人は絶対挑戦してほしい。」

【資料】ルーブリックの平均値の推移

7期生　ルーブリック評価の推移（2021年6月～2022年11月、NY研修）

	1年6月	1年1月	2年6月	2年11月	NY研修後	推移グラフ
A　社会的課題に関する知識理解	1.25	1.43	2.38	2.25	3.25	
B　英語活用力	1.25	1.29	2.00	1.88	3.13	
C－1　思考力	1.63	1.14	2.00	2.25	3.25	
C－2　創造力	1.38	1.14	1.75	2.38	2.88	
D　表現・発信力	1.00	1.29	1.63	2.25	3.50	
E　他者との協働力	1.63	1.71	2.13	2.13	3.38	
F　マネージメント力	1.38	1.14	1.88	2.25	3.00	
G　前向き・責任感・チャレンジ	0.88	1.00	1.25	1.75	3.25	
H　寛容さ	1.88	1.86	2.38	2.50	3.13	
I　能動的市民性	1.13	1.00	1.25	2.00	3.38	
J　自分を変える力	1.63	1.29	1.75	2.25	3.38	
平均	1.36	1.30	1.85	2.17	3.23	



※本校ルーブリックについての詳細は「４　実施の効果とその評価」参照。

２．４．３　広島研修

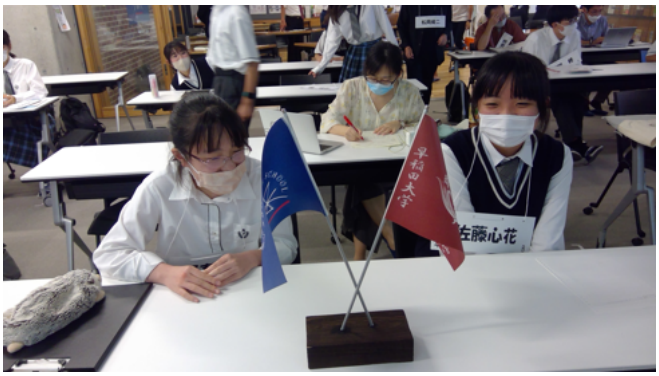
福島の復興を目指し学ぶ私たちは、原爆被爆から復興し、核無き世界を目指して世界に発信をし続け、歴史的使命を果たしてきた広島の在り方から、多くのことを学ばなくてはならない。未来創造探究をより深化させ、未来を切り開く一歩とすることを目指し、広島県立広島国泰寺高等学校と連携して下記の通り広島研修を実施した。

（１）日程・参加生徒

10 月 28 日から 30 日の二泊三日で行った。例年は二年次 10 数人を対象とした研修であるが、本年度は一・二年次 25 名が参加する大規模なものとなった。内訳は一年次 20 名・二年次５名、男女比は男子４名・女子 21 名であった。

（２）事前学習

事前学習として本校と協定を結んだ早稲田大学との協働で開催した１Ｆ地域塾に生徒は参加した。１Ｆとはイチエフと読み、福島第一原子力発電所の通称である。戦災からの復興を果たした広島に学びに行く前に、福島県・浜通りが抱える原発事故および廃炉事業が抱える問題と未来について考察することを目的とし、第０期全４回に参加した。



地域塾は本校を会場とし、地域の方や大学生、専門家や事業者（東京電力）が参加した。全体会で基調講話を聴いたのちグループに分かれて意見を出し合い、最後に分科会で出された意見を共有する流れになっており、９月 17 日の第三回１Ｆ地域塾では、実際に第一原子力発電所の見学も行った。

（３）実施内容（10 月 28～30 日）

初日は広島の国泰寺高校へ赴き２年生と授業に混ぜてもらい新エネルギーについてディスカッションを行った。その後ホテルに荷物を置いたのち平和記念資料館へ。たっぷり２時間弱見て回ることができた。

二日目の午前中は国泰寺高校有志とディスカッションをした。全体テーマを「ヒロシマとフクシマの高校生でいること～復興・継承・未来について～」とし、広島の生徒に「福島のイメージ、小中のころの平和教育、ヒロシマの高校生だと意識する体験」本校生から「広島のイメージ、平和資料館の感想」を出し合い、フリーディスカッションでは「そもそも何のために後世に伝えていくのだろう？」「「最後の話者」がいなくなる広島の伝承」「自分たちの世代がフクシマを伝える「最後の話者」であること」について話した。

「広島で福島で生まれたからってそういうのを期待されるのも重い」という意見や「伝承する意味ってあるの」という意見も出た。教員からは「人間の愚かさを舐めないほうがいい（だから伝えていかなければ）」とコメントがあった。

13 時からは梶本淑子さんによる被爆体験講話。メッセージ性の強い重みのあるお話で、終了後も生徒からは質問が挙がった。次いでボランティアガイドのさんに平和祈念公園と市内南東の陸軍被服支廠跡のガイドを受けた。午前中に「別に伝承しなくとも」と出たところで、被爆者の方から「伝えていくべき！」と訴えられ、最後の被服支廠では「残したものをどう活用するか」を考える展開になった。三日目は宮島を見学し帰路についた。

生徒からは次のような感想が出された。

「大人になるにつれ、話せる自由が制限されるような気がする。子どもは、立場がないから語れるものがあり、それが強みかもしれない。何でも質問できる今のうちに知識をつけたい」「原爆ドームは核廃絶を願う世界的テーマの象徴。１Ｆの遺構化は何のためだろう」「ふたば未来には原発事故を語ることに対しての押しつけはないけど、期待はされていると思う」「浜通り＝原発というレッテルはやめて欲しいし、浜通りの人だけで原発を考えるのもおかしいと思う。福島、日本全体で考えていかないと」「忘れるということは過去の人に対する冒涜だと思う」「私たちは梶本さんのお話を聞くのが最後かもしれない。語ろうとする気持ちが宝物なんだよ、と最後に言われた。語ることで相手に伝えられるし、もしかしたら同時に自分も救われていくのかなって思った」。